

広 東 語 の /e/

清 水 茂

京都大学文学部助教授 (中国語学・文学)

/e/ in Cantonese

Shigeru SHIMIZU

According to S. Egerod's system, the most simplified phonemic writing at the present, there are eight vowels in Cantonese: /aa/, /a/, /e/, /i/, /o/, /ø/, /u/ and /y/. Of these, /e/ is subdivided according to origin. One type comes from [*i], and the other from [*a]. /e/ combined with the three finals /eq/ [ɛ:ŋ] and /ek/ [ɛ:k] belongs to the former, and /e/+zero/ [ɛ:] to the latter.

It is evident that most /eq/ words (tzu 字) may also be pronounced as /iq/ [ɛŋ], and a half of /ek/ words may similarly be pronounced as /ik/ [ek]; and /iq/ or /eq/ as the first word of a compound consisting of two words, is more often pronounced as [ɛŋ], whereas as the second, or as a single word it is more apt to be pronounced as [ɛ:ŋ]; and sometimes [ɛŋ] and [ɛ:ŋ] are used without clear distinction. From this fact, we may say [ɛ:ŋ] is the emphatic pronunciation of [ɛŋ] in the same phoneme /iq/. And [ɛ:k] is similarly the emphatic form of /ik/ [ek], although in this case the problem is not as simple as with /iq/.

/e/+zero/ may be explained as /a/+zero/, because /a/ is the only phoneme without an ending /zero/.

Thus if /y/ is identified with /u/, as in Dr. Y. R. Chao's "Cantonese Primer", and /e/ is identified with /i/ or /a/ as proposed in this paper, phonemic vowels in Cantonese could be simplified into six: /aa/ (/a/ better), /a/ (/e/ better), /i/, /o/, /ø/ and /u/.

1. 広東語 (Cantonese) は、北方方言 (Mandarin), 吳方言, 閩方言, 客家方言 (Hakka) とならぶ、中国語の重要にして有力な方言である⁽¹⁾。だから、むしろ中国語の広東方言、又は、粵方言と呼ぶべきであるが、ここでは、Cantonese と英語で呼称されるのを直訳して、広東語と呼ぶ。この方言は、中国の広東省のうち、広州市を中心とした地域において話され、さらにいくつかの小方言に分けられるが⁽²⁾、ここでは、その標準語と考えられている広州市および香港⁽³⁾ではなされる言語を対象とする。

広東語は、中国語の一方言であるけれども、北方を山脈で、東方、南方を海でさえぎられた広東省の地形が閉鎖的であつたため、北方中国語から恒常的な影響を受けて変化する

ことがなく、現代においては、中国語の標準語である北方方言とはかなりはなはだしい差異を生じている。そこで、北方方言の一変態としてではなく、別の音韻組織を考える必要があるのである。

さらに、広東語が、北方方言と別に研究されるのは、つぎのような事情もある。そのひとつは、広州が、中国において古くから西方貿易の中心地であって、たえず外国人が来航し、ことに、16世紀に、ポルトガルが澳門を、19世紀に、イギリスが香港を得て、植民地としたこと、さらには、在外華僑の多く、とりわけアメリカ華僑は、ほとんど広東省出身であることなどによって、外国との接触が多く、実用上の必要から、ヨーロッパ人に研究されており、現在でも、中華人民共和国と中華民国が、標準語運動をおしすすめているにかかわらず、香港、澳門の二つのヨーロッパ植民地では、広東語で教育しているという事実があって、北方方言とは、別の言語のようにして、外国人には、あつかわれて来た。

また、北方方言から恒常的な影響を受けなかったため、北方方言が変化したあと、古い中国語の痕跡をよくとどめ、特に韻母 (final) において、隋唐 (7~10世紀) 時代に編輯された韻書の体系を比較的良好に保存していることは、古代中国語の研究者にとって、好資料となるためである。

2. ここで取り上げたい問題は、広東語の韻母 (final) のうち、主母音 (main vowel) の音素 (phoneme) /e/ についてである。

広東語の母音 (vowel) の特徴は、中国語の標準語たる北方方言と比べて、つぎのようなどころにある。

1) 母音に長短の区別があり、その長短によって、陰声母 (unaspirated and voiceless initial) の入声 (entering tone) では、高調と中調とに分かれる⁽⁴⁾。

2) 介母 (middle vowel) がないこと。したがって、広東語の音節は、すべて、I (Initial) + V (Vowel) + E (Ending) というかたちで処理できる。

広東語の発音表記については、中国・欧米の学者によって、いろいろなところみられ、それは、ある意味で、広東語の音韻体系を示すものであった。さいしょに、音声学 (phonetics) 的な反省をともなって表記されたのは、Daniel Jones and Kwing-tong Woo: "A Cantonese Phonetic Reader," London, 1912. であろう。その後、黄錫凌 (S. L. Wong) 氏が、1941年に「粵音韻彙」という漢字一字一字の広東音字典を著わした。これは、現在のところ、もっとも信頼できる発音字典だと思われるものであるが、その標音は、萬国音標文字で発音も表記しながら、いくらか音韻論 (phonology) 的な解釈が加わって

いる。ただし、以下、漢字音の用例をあげるときには、この書をしばしば使用する。

さらに、Y. R. Chao (趙元任) 博士の “Cantonese Primer” では、いくらか音素論 (phonemics) 的な解釈を加えて、声調 (tones) もいっしょにふくめる表記法が使用された。

これに対して、音声学的な観察をもととして、Chao 博士の C.P. の表記を批判しつつ、新しい表記法を主張したのが、K. M. A. Barnett “A Transcription for Cantonese—Notes on Mr. Yuen Ren Chao’s “Cantonese Primer” B. S. O. A. S. XIII-3, London, 1950. であって当面の問題にする広東語の韻母 (final) について、音声学的に整理して作成された表があるので、それをつぎにあげよう⁽⁶⁾。

L	M	S	L	S	L	L	S/L	S	L	L	L
ɑ:	á	a	ɛ:	ɪ	i:	y:	ø:	o		ɔ:	u:n
ɑ:l		ai		ei			øy			ɔ:l	u:l
ɑ:u	áu				i:u			ou			
ɑ:m	ám				i:m						
ɑ:n		an			i:n	y:n	øn		õ:n		u:n
ɑ:ŋ	á·ŋ	aŋ	ɛ:ŋ	ɪŋ			œœŋ	uŋ		ɔ:ŋ	
ɑ:p	áp				i:p						
ɑ:t		at			i:t	y:t	øt		õt		u:t
ɑ:k	á·k	ak	ɛ:k				œœk	uk		ɔ:k	

L=長音; M=中間音; S=短音

このうち、á, a, ɛ, ɪ, o (いずれも短音) は、助辞 (particle) にしかあらわれない。この表は、おそらく、管見の及ぶかぎり、いちばん、こまかく分けた韻母表であると思われる。

そのほか、陳慧英・白婉如 “廣州音和北京音的比較” (“方言和普通話叢刊” 第一本, 北京, 1958) pp. 9~10, 袁家驊等 “漢語方言概要” p. 183 の韻母表も、音声学的記述であるが、Barnett と基本的には、いっしょである。これらと Barnett の韻母表とのちがいは、助辞にしかあらわれない韻母をはぶいたほか、[á] と [a] と合併し、[õ] と [ɔ] とを合併しているのが、主な点である。もちろん、表記のちがいも、いくらかある。たとえば、[œœŋ] のごときは、[œ:ŋ] とあらわされる。

さて、このような韻母を音素論 (phonemics) 的に、整理して、ローマ字化するのに、Barnett 氏自身の試案もあり、それにいくらか修正を加えて、実用化したのが、K. P. K. Whitaker: “1200 Chinese Basic Characters,” London, 1958. および S. L. Wong の遺著 “Cantonese Conversation Grammar,” Hong Kong, 1963. (以下 C.C.G. と略称) の採用した表記法である。

わが国では、藤堂明保,⁽⁷⁾ 松本一男,⁽⁸⁾ 頼惟勤⁽⁹⁾ の諸氏によって、試論が出されているが、いずれも介母を用いて解決しようというのが、広東語の音声とはなれる結果となり、賛成しがたい。

音素論的にもっともよく整理したと思われるのは、Chao 氏の指導を受けたといわれる Søren Egerod 氏の説であり、かれは、その著 “The Lungtu Dialect” (隆都方言), Copenhagen, 1956, p. 12 において、標準広東語 (Standard Cantonese) の音素表記 (phonemic writing) を、つぎのようにあらわした。ここでは、声母 (initial) をはぶき、韻母のみをあげる。

Final Consonants (Ending)

/p/	/m/	/w/
/t/	/n/	
		/j/
/k/	/q/ [ŋ]	

Vowels and vowel clusters

	/y/ [y:]	
/i/ [e][i:]		/u/ [o][u:]
	/ø/ [ø][œ:]	
/e/ [ɛ:]		o [ɔ:]
	/a/ [a]	
	/aa/ [a:]	

/i/ is pronounced [e] before /k/, /q/, and /j/, and is pronounced [i:] before /p/, /m/, /n/, /w/, and /zero/.

/u/ is pronounced [o] before /k/, /q/, and /w/, and is pronounced [u:] before /t/, /n/, /j/, and /zero/.

/ø/ is pronounced [ø] before /t/, /n/, and /j/, and is pronounced [œ:] before /k/, /q/, and /zero/.

これは、相当に整理された音素表記であるが、なお、いっそう整理の可能性はある。たとえば、/y/ と /u/ [u:] とは、Chao 博士の C. P. p. 22 では、ひとつの “u” で表記され、

u { [u:] After labials (except m) and when initial
[y:] After other initials (except ng)

とある。この条件は、Egerod 氏の条件と、相い侵さないから、そのまま、適用できるはずである。それはさておき、ここで論じようとするのは、このなかの /e/ [ɛ:] という phoneme が、どういう性格を持つかということである。

なお、以下の表記は、Egerod 氏の音素表記を使用する。

3. /e/ [ɛ:] は, Barnett 氏の韻母表に見られるごとく

/e+zero/, /eq/, /ek/

と, その Ending は, 3つにかぎられる。これは, 他の vowel にくらべて, すくない。
 ということは, /e/ が, がんらい, 独立していない phoneme であったことを予想させる。
 そこで, /eq/, /ek/ に所属する漢字について, C.S.P.P.C. (p. 21) で調べてみると, /eq/ には, つぎの41個の漢字がある。

/eq/ [ɛ(:)ŋ] 餅, 柄, 病, 疔, 釘, 頂, 定, 精, 井, 淨, 正, 鄭, 驚, 頸, 鏡, 輕,
 羸, 影, 靈, 鯪, 領, 嶺, 靚, 名, 命, 平, 瓶, 星, 腥, 醒, 姓, 聲, 成, 城, 聽,
 廳, 艇, 青, 清, 晴, 請。

そのうち, 実に35個の字が, 同じ書 (pp. 28-30) の /iq/ [iŋ] (Barnett [iŋ], Egerod [eŋ]) にも所属し,

鄭, 頸, 鏡, 鯪, 靚, 廳。

の6個のみが, /iq/ のなかに見当たらない。ただし, このなかでも, あることばは, /iq/ となることもある。

靚 /leq/ (うつくしい)→靚仔 /liq caj/ (ハンサムボーイ)

この区別について, 陳慧英・白婉如は,

“文語音が eq (すなわち /iq/) 韻の字は, 口語音は eq (すなわち /eq/) 韻である。たとえば, ‘命’ の文語音は meŋ (/miq/) で, 口語音は meŋ (/meq/), ‘聽’ の文語音は t'eq (/thiq/), 口語音は t'eq (/theq/), ‘淨’ の文語音は tseq (/ciq/), 口語音は tseq (/ceq/) である。広州の eq (/eq/) 韻の字はほとんど全部口語音で, ほんのすこしの eq (/eq/) 韻だけが, 文語音と口語音の区別がない。たとえば, ‘鄭’ tseq (/ceq/) がそれだ”。

と述べている。

これによれば, 一見, 文語音 /iq/ が口語音で /eq/ になるようであるが, そうとはかぎらない。口語でも, 同じ文字が /eq/ と /iq/ と発音されるばあいがある。たとえば, さきほど, 陳・白両氏によってあげられていた“淨”についていえば,

淨係 /ciq haj/ ⁽¹¹⁾ (ただ…だ)→乾淨 /kon ceq/ ⁽¹²⁾ (清潔な)

と, C.P. のなかでも, 二つの発音が表記されている。そういう例をいくつかあげれば,

声音 /siq jam/ (こえ) ⁽¹³⁾→一声 /jat seq/ (ひとこえ) ⁽¹⁴⁾

城市 /siq si/ (まち) ⁽¹⁵⁾→省城 /saaq seq/ (省城, 広州市のこと) ⁽¹⁶⁾

成日 /siq jat/ (一日じゅう) ⁽¹⁷⁾→迫成 /pik seq/ (むりやりにさせられる) ⁽¹⁸⁾

精神 /ciq san/ (元気がある)⁽¹⁹⁾→好精 /how ceq/ (たいへん気がきく)⁽²⁰⁾

のようなものがある。これらの例は、いずれも、C.P. か C.C.M. のなかからぬき出したもので、口語として用いられているものである。

これらの例から、ひとつの傾向がみちびき出される。それは、

- 1) 二字の熟語の上の字は、/iq/ になりやすく、下の字は /eq/ になりやすい。
- 2) 一音節で、独立して用いられるときは、/eq/ になる。たとえば、一“声”，好“精”などがその例である。“声”は、そのほか、擬声語のあとに、たとえば、“噪聲”/pampam seq/ (爆弾の破裂音)，“胡胡声”/wuwuseq/ (飛行機の爆音) などのように用いられると、/seq/ になる⁽²¹⁾。また、好“精”の好は、“たいへん” (北京語，很) にあたる副詞であって、このとき、“精”は一字の形容詞として用いられているのである。“鄭”がつねに、/ceq/ と発音される (上述) のは、この字が、ほとんどいつも、姓として、単独に使用されるためであろう。

以上の傾向があることに注意すれば、このばあい、/eq/ は、/iq/ と意味上において区別をもつものでなく、むしろ、/iq/ がその字の占める位置 (position) によって強調 (emphasis) されたものと解釈できるように思う。もっとも、/iq/ を持つ語が、以上の位置 (position) をとれば、必ず /eq/ となるというのではなく、/iq/ をそのまま保持するものもあるが、しかし、そのばあい、それを /eq/ と発音しても、別の音素と解釈して、意味上の混乱を来たすことのない点からいっても、意味を区別する単位としての音素という性格を持たない。

つまり、/eq/ は、/iq/ の口語における強調 (emphasis) と考えられるのである。広東語において、短母音が、口語における強調において、長音化する傾向は、/a/ と /aa/ のあいだにも見られる。たとえば、

生命 /saqmiq/⁽²²⁾→先生 /sin saaq/⁽²³⁾

の“生”の字がそれである。これについても、陳慧英・白婉如は、/saq/ を文語音、/saaq/ を口語音とするが、⁽²⁴⁾ 上例によれば、そうとはかぎらない。

つぎに、/ek/ も、/eq/ と同じように解釈できるかといえば、これは、/eq/:/iq/ のような関係のほか、別の要素、つまり声調 (tone) の問題がからんで来て、やや複雑である。

ここで、C.S.P.D.C. によって、[ɛ(:)k] すなわち /ek/ 韻母を持つ漢字をあげよう。

壁 笛 糴 績 迹 脊 蓆 隻 只 炙 拓 撫 跣 吃 屐 劇 癰 劈 錫
石 碩 拓 顛 錫 尺 呎 赤

このうち、

壁 績 迹 脊 蓆 炙 癰 劈 錫 赤

の10字は、/ik/ [ik] に見える。これらは、/eq/ のばあいと同じように、/ik/ の強調と考えられる可能性がある。

つぎに、のこり17字について、隋唐時代の韻書では、どうあつかわれているか、この時代の音韻体系を反映するといわれる広韻（1008年刊行）によって、調べてみよう。

笛 籬——入声二十三錫，徒歷切，同音の字，荻，狄，敬，翟 etc. (C.S.P.D.C. /tik/)

隻（只一隻の略字）拓 撫 跖——入声二十三昔，之石切，同音の字，炙，蹠 etc.

(C.S.P.D.C. /cik/)

吃——入声二十三錫，苦擊切（擊 C.S.P.D.C. /kik/）

展 劇——入声二十陌，奇逆切（逆 C.S.P.D.C. /jik/）

石 碩 柘 𪔐——入声二十二昔，常隻切（隻，上を見よ）

踢——入声二十三錫，他歷切，同音の字，逖，倜，剔，惕 etc. (C.S.P.D.C. /thik/)

尺 呎（尺と同音）——入声二十二昔，昌石切，同音の字，赤 (C.S.P.D.C. /chik/)

これから見ると、C.S.P.D.C. で /ik/ を持たない字も、

1) 笛，隻，踢，尺のように、広韻で同音の文字が、/ik/ という韻母を持つものか、

2) 吃，展，石のように、反切下字が、/ik/ を持つものか、

であることがわかる。つまり、現在、/ik/ という韻母を持たない字も、がんらい /ik/ を持っていたろう、そして、おそらく /ik/ から変化して来たものであろうと、想像される。ただし、/ek/ と /ik/ とのあいだに、現代の広東語で、/eq/ と /iq/ のような字の位置によって変化するひとつの傾向がみとめにくいので、/eq/ のように、/iq/ の強調とは、きめがたいところがある。

それともうひとつ、広東語では、p, t, k という子音韻尾 (consonant ending) を持つもので、主母音 (main vowel) が、短音のものは、高調 ㄣ [55]、主母音が、長音のものは、中調 ㄣ [33]、という声調 (tone) になるのが、ふつうで、/ik/ [ik] 短母音では、高調、/ek/ [ɛ(:)k] 長母音では、中調となる字がある。たとえば

壁 /pik ㄣ/→/pek ㄣ/

績 /zik ㄣ/→/zek ㄣ/

劈 /phik ㄣ/→/phek ㄣ/ ⁽²⁵⁾

がそれである。これらは、主母音の変化にともなって、自然に声調も変化したようである。

なお、この /ik/ のうち、*脊、瘠、踏、鶴、*炙、蹠（以上、/cik/）、*赤（/chik/）、*錫、褐（以上 /sik/）が中調を持つのは、異例であるが、そのうち、*印の字は、前述のごとく、/ek/ を同時に持つ字である点、注意されてよい。

これらは、がんらい高調であったのが、/ek/ 韻母を持って、中調になったため、類推によって、/ik/ も中調となったものか、あるいは、c, ch, s という、口蓋音 (palatal)⁽²⁶⁾ が、/i/ にひびいて、長音のような性格を持ち、中調に転じたものであろうか。いずれにしても、/ik/ の中調が c, ch, s という口蓋音につづくばあいのみ、生じていることは、注意すべきであろう。

このように見て来ると、/ek/ は、/ik/ から分かれたものであるが、/eq/ と /iq/ のように、一つの音素が、強調されたときの形というように、いいがたいようである⁽²⁷⁾。といって、/cik/⇌/cek/, /chik/⇌/chek/, /sik/⇌/sek/ のように、両方のあいだを動揺している例もあって、二つの音素がはっきりと、意味上のちがいを示さぬことも多い。/ek/ は、/ik/ の特殊なばあいと考えて、独立の音素とせず、なにかの記号を加えて示し、いわゆる変音 (changed tone) 現象と同じようなとりあつかいでよいのでなかろうか。

さて、/e/ を持つ韻母 /e/, /eq/, /ek/ のうち、/eq/, /ek/ は、/iq/, /ik/ から分かれ、/iq/, /ik/ と解釈し得ることを示した。それでは、/e/+zero/ はどうであろうか。/e/+zero/ は、そのほかの二者とちがひ、/i/ と関係しない。/e/ に所属する字は、中古音において、麻韻開口三等韻に属する (*ja) 字である⁽²⁸⁾。麻韻開口二等韻 (*a) は、現代広東語では、/aa/ となる。そこで /aa/ が、介母“i”を吸収して、せまくなり、[ɛ:] となったと考えられる。いま、/a/+zero/ という音素を見ると、Barnett 氏は、助辞 (particle) のみにあるといい、他の多くの学者は、Barnett 氏にもとづく C.C.G. をも含めて、空欄とする。他の Vowel の音素が、Ending /zero/ をとるのに、/a/ だけが欠けるというのは、ここにおぎなうべきものが、ほかにまぎれているのではないだろうか。つまり、/e/+zero/ [ɛ:] がそれである。

4. 広東語の /e/ は、がんらい別の起原を持つ、/e/+zero/ と /eq/, /ek/ とが別のみちをたどって、よりあつまったものである。そして、/eq/, /ek/ が、/iq/, /ik/ とそれほどはっきり区別が意識されていないこと、特に /eq/ と /iq/ とでは、位置による強調関係と思われるものが存在するところから、別の音素 (phoneme) とするより、[ɛ:ŋ] は、/iq/ のひとつの形とすべきで、/ek/ は、なお問題が存するが、同じようにあつかえる可能性があること、このようにこの二つ [ɛ:ŋ], [ɛ:k] を /iq/, /ik/ の特殊な形態と考え、/e/+zero

[ɛ:] を、/a/+zero と解釈すれば、/e/ という音素はなくなる。かくして、広東語の主母音の音素は、

/aa/, /a/, /i/, /o/, /ø/, /u/

という六つとすることができるのではあるまいか。もし、/aa/ を /a/, /a/ を /e/ と書きなおせば、⁽²⁹⁾

/a/, /e/, /i/, /o/, /ø/, /u/

とすることができよう。

(1964年 8 月)

(附記) これは、アジア経済研究所の海外派遣員として、「華僑の生活形態」という研究題目のもと、1960～1961年ホンコンで調査にたずさわった成果の一部である。[eq] と [ɛ:ŋ] が、位置による変化らしいことは、そのとき、実際に耳によって感じたが、この論文では、主観的解釈とのそりをさけるため、書証を主としてあげることにした。[ek] と [ɛ:k] も、わたしの感じでは、同様の現象と思われるが、確信が持てぬので、強調しなかった。広東語を母語とする人によって、調査されることを期待する。

注 (1) 王力：中国語文講話、北京、1950 による。ただし、現在の多くの学者は、1) 北方話、2) 吳方言、3) 湘方言、4) 贛方言、5) 客家方言、6) 粵方言、7) 閩南方言、8) 閩北方言のような分け方をする（袁家驊等著「漢語方言概要」北京、1960）。李方桂（“Language and dialect”, The China Year Book 1937 issue, third of Publication, 小川環樹訳「支那における諸民族の言語と方言」支那学 XI-4）および、Y.R. Chao（“Cantonese Primer” pp. 4～5）もこれに近い。

注 (2) 袁家驊等 *ibid.* によれば、1) 粵海系、2) 欽廉系、3) 高雷系、4) 四邑系、5) 桂南系に分けられ、広東省方言調査指導組編「四邑人學習普通話手冊」（広州、1958）では、広東省の方言地域を八つに分けているが、そのなかには、客家方言、閩方言（海南、潮州）に属するものがふくまれるから、それらをのぞき、1) 四邑、2) 四會、3) 雷州、4) 高州、5) 北海に分けられている。この五種の方言は、ほぼ、前者の 2), 3), 4) に相当し、このなかに、標準語たる粵海系、広西省で語られる桂南系は、はいらない。

注 (3) 黄錫凌 (S. L. Wong) : 「*粵音韻彙*」 (“A Chinese Syllabary Pronounced According to the Dialect of Canton”, 以下 C.S.P.D.C. と略称) 上海, 1941, P. 2 “總是以広州話做模倣的標準, 広州語音当然就是粵語的標準音了。香港所說的粵語和広州沒有分別”。Y. R. Chao (趙元任) : “Cantonese Primer” (以下 C.P. と略称する) Cambridge, Mass. 1947, p. 6 “Since the dialect of Canton City has considerable cultural prestige and is regarded more or less as the standard form of Cantonese, it is the usual form of Cantonese foreigners or Chinese from other provinces would expect to learn. It may be noted that, while the form of Cantonese changes more and more as one travels south from Canton down the Canton-Kowloon Railway, the dialect in Kowloon and Hongkong is nearer to that of metropolitan Canton than to those of the neighboring districts.”

注 (4) 李方桂 : *ibid.* ; Y.R. Chao C. P. p. 240. もちろん、少数の例外はある。その例は、以下の文にもあらわれる。

注 (5) 日本語訳本あり。魚返善雄訳「広東語の発音」東京、1942。

- 注 (6) B.S.O.A.S. XIII, p. 732
- 注 (7) 藤堂明保: “中国語音韻論”, 東京, 1957, p. 130
- 注 (8) 松本一男: “広東語の音系” (中国語学研究会編 “中国語学事典” 東京, 1958, p. 167)
- 注 (9) 頼惟勤: “広東語の音韻論について”, 中国語学 70, 1958, 1 月, pp. 3~5.
- 注 (10) 陳慧英・白婉如 *ibid.* p. 14.
- 注 (11) C.P. p. 131.
- 注 (12) *ibid.* p. 189.
- 注 (13) *ibid.* p. 113.
- 注 (14) *ibid.* p. 115.
- 注 (15) C.C.G. I-2, p. 11.
- 注 (16) *ibid.* I-1, p. 25.
- 注 (17) *ibid.* I-1, p. 97.
- 注 (18) *ibid.* I-2, p. 103.
- 注 (19), (20) C.P. p. 71.
- 注 (21) C.C.G. Lesson 55 に, 多く用例があつめられている.
- 注 (22) C.P. p. 157.
- 注 (23) *ibid.* p. 101.
- 注 (24) 陳慧英・白婉如 *ibid.* p. 14.
- 注 (25) 以上 3 例いずれも C.S.P.D.C. p. 21 および pp. 31~32.
- 注 (26) cf. Barnett, *ibid.* p. 726.
- 注 (27) Ending /k/ をとるものでも, 短母音が, 口語の強調されたときに, 長母音となる例として, “黒” という字がある.
- 黒龍江 /hakluqkoq/ (地名, C.P. p. 167) → 黑板 /haakpaan/ (こくばん, C.P. p. 107)
- このときは, 長音となっても, 中調にならず, 高調を保持する. ただし, 黄錫凌氏は, C.S.P.D.C. および C.C.G. において, とともに /haak/ 音の存在を認めず, Barnett 氏は, このばあいの韻母は, [ä·k] として, [a:k], [ak] と区別する. (Barnett: *ibid.* p. 732).
- 注 (28) 袁家驊等 *ibid.* p. 197.
- 注 (29) 王力: “広州話浅説” 北京, 1957 では, [ɛ] を e, [ɛm] を em, [ɛn] を en と表記している. ただし, [ei] を ae, [ɸy] を ei と表記するなど, 同じ音声に, 別の表記を使用したりしている点で, 全面的には賛成しがたい.